

# 佑啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 原風景

### 在原 寿

「在原課長はいつたい何年の生まれですか？」毎年、多くの新人職員が入る佑啓会では幅広い年齢層の職員がおり、酒席での若者との会話ではジェネレーションギャップを感じる(ちなみに私は昭和四十五年生まれで今年四十五歳)。更に最近では東京や市川の事業所の職員も混ざり、地域格差もあるようだ。自分では当たり前に小さい頃の話をしていたつもりが、同席の若人とはずれがあったらしい。



第91号

機関紙

私の家はこんな感じだった。まず食事について、例えば五月ともなれば絹さやエンドウは毎日のように味噌汁、お浸し、卵とじと絹さやのフルコース料理が並ぶ。ナス、オクラ、ピーマン、トマト、キュウリなどなど、畑で採れる野菜に応じて毎日同じようなメニューの繰り返しだった。楽しみにし

餅つきなどなど。一度稲刈りと私の運動会が同じ日になってしまったが、当然稲刈りが優先され、家族が誰も来ない年もあった。さみしかったが、稲刈りなんだから仕方ないという気持ちのほうが強かった。



では昔を思い出すと悲しいかというところでもない。今思うと、楽しいことのほうが多かったし、家族行事は大好きだった。父親が一番先に田んぼや畑に行き、家族が仕事をしやすいように段取りをする。爺ちゃんや婆ちゃんも黙って父親の指示通りに作業をしていた。母親は誰よりも朝早く起きて全員の朝食と昼食の弁当を作ってくれている。ちなみに私はと言うと一〇分くらい手伝って、その後は、カエルやカメを捕まえて遊んでいた。楽しみはというと畑や田んぼで食べる母親の作ってくれた弁当と井戸に冷やしてある黄色のスイカだった。いつもと違う雰囲気でも過ごすことが楽しかっただけなのかもしれないが、家族全員が同じ方向に向き、一所懸命に生きていた感じが大好きだ。この仕事に就き自分が利用者と一緒に農耕科で畑仕事をしているとふとそんなことを思い出すがあった。当時の父親は大きく強くちよつと怖い存在。母親はいつも笑っていて絶対味方になってくれるやさしい存在だった。そんな両親ももうすぐ八〇歳。今でも畑には毎日行っているが、白髪やシワも増え、何よりも体全体が小さく見える。

歳をとるのは当たり前のことだが、自分が小さい頃の強くてやさしかった両親のことを思い出すと何となく複雑な気持ちにもなる。歳をとれば老いるということはごく当たり前のことなのに・・・

ふる里学舎開所当時から入所している利用者の親御さんとはもう二〇年以上の付き合いとなった。ふる里学舎では家族とお酒を飲んでお話をすることも多かったこともあり、お互い出会った頃と変わっていないかと思っていたが、体は正直なもので残念なことに薄くなったものや、張り出したものなど、経年変化を痛感する。当時の養護学校を卒業して入所した利用者も今年で四〇歳だ。当然その親御さんたちも歳を重ねてきた。以前親御さんと話をしていた時にこんな話を聞いた。私はこの子より先に逝けない。この子を看取ってから逝くことが出来れば本望だ。親の気持ちとすれば兄弟や親せき、誰にも面倒をかけたくない。それ以上に本人のことを守ってあげられるのは私しかないと思うのかも知れない。しかし普通に考えれば、子より親が先に逝くのが正しい順番でその逆は親不幸なのである。親は子を考えてこそその気持ちかもしれないが、子にとってみれば親の勝手な思いなのである。よく里見理事長が親御さんとの会話の中で、「これから先長いお付き合いになります、お子さんとはもともと長い付き合いになりますから。」と語っていた。その時は何気なく聞いていたが、とても意味のある言葉である。私が言うのもおこがましいが、安心してふる里学舎にお子さんを預けて欲しいと思う。

いと思う。理事長は常々福祉は継続することが大事で打ち上げ花火のような派手なことをしても一瞬の幸せなら意味がない。本場のプロならば先の先を考え、地味に地道に長く続く仕組みでなければならぬ。

もう一つ昔の思い出に欠かさないのは、遊んでくれたのの爺さんの存在だ。日がな一日庭で日向ぼっこをするのが日課で、何年も庭先から外に出ることはなかった。部屋は離れにあって、トイレは直径五〇cmくらいの丸い穴が開いているだけ。トイレトベーパーはなく、電話帳や新聞紙を使っていた。ひ孫である小学生であった私と何度となくはさみ将棋をしてくれた。とても強く一度も勝ったことはなかった。ひ孫相手に手加減なく本気だった。当時は勝てなくて悔しかったが、今考えると本気で相手をしてくれていたことをうれしく思う。

もしれない。もちろん若い職員も頑張っていないわけではない。行事の準備、作業活動の充実、個別支援計画の作成、親御さんからの相談、たくさん悩みながら懸命にやっている。この先たくさんさんの失敗をして、本人や家族の皆さんに迷惑をかけることもあるかもしれないが、長い目で見てアドバイスを頂けたらありがたいと思う。それがまた将来に繋がっていくのだから・・・

ふる里学舎は四月から新たな展開が待っている。八千代市福祉作業所と市川市発達支援センターの運営受託。福祉避難所(体育館)のお披露目パーティー。初めて法人で建設したグループホーム木更津のオープン。あちこちで新チームの打ち合わせが行われ、職員たちは活気づいている。そしてまた若い職員がたくさん入ってくる。もう親子ほどの歳の差だが、そんな若者とも本気で向き合い一緒に仕事や酒席を共にできるのを楽しみにしている。たまには寿司でも食べに連れて行こうか。回る寿司で良ければ。

(しぜん工房 施設長)



相本  
晶子

て欲しいとの思いにもかかわら

用することになり、それまでで

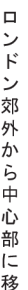
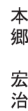
その頃茱里にとっての最大の危

が戻ってきました。この時は本当に

その後学齡となり船橋養護学

最後になりますが無事に茉莉が

（松香園利用者 相本茉里さん母）



次にバッキンガム宮殿。三日目に

話の中に「オーバーエイジ」らしき



プスくらい。ディナーのローストビ

国では私は独り歩きも出来ないの

伊藤 千陽

冬のきる雪

伊藤 千陽